城山エコミュージアム通信

平成２７年（２０１５）１２．１５　第２６号

エコミュージアムとは、エコロジー（生態学）とミュージアム（博物館）の造語で、その地域そのものが、生きた貴重な資料であるという考え方の下に、地域の歴史や文化、自然について学び、地域への愛着を深め、交流を深めていく活動です。相模原市城山エコミュージアムは、地域住民主体の活動により資料収集・調査等を行い、資料を現地において保存し、展示し、広く活用することを目的として活動しています

平成２７年度城山エコミュージアムツアー開催結果レポート

テーマ：久保沢（くぼさわ）～中沢（なかざわ）の歴史と人を訪ねる

街道筋に育まれた文化

さる10月24日土曜日好天に恵まれさわやかな秋の一日、城山エコミュージアムツアーが開催されました。まずは、鎌倉道起点、温泉坂の石標のある五差路から。ここから甲州みち・下街道（シタケイドウ）といわれる道を中沢まで、見どころ満載のコースを歩きました。（コース図は次ページ）街道筋ということもあって、古くから文人墨客と人々の交流があり、現在までその活動は続き、地域の文化教養に対する気概の高さに感じ入る時間でした。

身近な石造物からも歴史と人のつながりを感じました

見どころの中で、久保沢観音堂、加藤武雄生地・墓、尻無沢では、地元の方から直接お話を聞くことができ、知識でないリアルなお話が興味深かったと参加者から感想がありました。ご参加頂きありがとうございました。（田畑　房枝）

地元のお話をしてくださった皆さん

村田公男（むらたきみお）さん
（久保沢観音堂と石工のお話）

金子房吉（かねこふさきち）さん
（尻無沢と分水函のお話）

加藤正彦（かとうまさひこ）さん
（加藤武雄の墓と加藤武雄生家のお話）

今年はツアーに関する昔の写真を展示

城山地区市民文化祭に出展

10月31日（土）・11月1日（日）開催の文化祭展示の部に参加。城山エコミュージアムツアーの様子と、ツアーに関する「昔の写真」展示をおこないました。会場が2階大会議室へ移り、戸惑いもありましたが、スタッフの熱い思いで素晴らしい展示ができました。来場者も多く、自然観察会や他団体との交流もできて充実した2日間でした。ご来場頂いた皆様、短い準備期間で展示準備を担当してくださったスタッフの皆様有難うございました。展示は2月19日～21日にボーノ相模大野ユニコムプラザさがみはらで開催される相模原市文化財展でも展示します。ぜひご来場下さい。（宮崎　紀美子）

今回のトピック
- ■エコミュージアムツアー紹介
- ■城山地区市民文化祭展示報告
- ■城山探訪　■ミニ図鑑、等

今回のおすすめをスタッフ直筆コメントで紹介

距離は短くても内容は盛りだくさん！

都留という地域の地域から、江戸時代から近代にかけて
日蓮宗寺院、八木家石橋門、喜多梅厳、加藤武雄など
地域の歴史にかかわる人物を輩出したのは興味深い。

自然豊かな中から変えないものを大切にしてきたのだろうか。

ルートマップ

養蚕

地域の養蚕に関わっていた方から伺ったお話を掲載する連載コーナー

第４回　「戦後の養蚕」

齋藤（さいとう）　敏男（としお）さん（元養蚕組合長）へのインタビューから

従来クワの葉だけを収穫して蚕に与えていましたが、省力化のために条桑育と言って葉のついた枝をそのまま与えて飼育する方法が奨励され行われるようになりました。昭和 40 年代には、繭を大量に生産するために野外で蚕を飼育する露天条桑育や簡易鉄骨の小屋の中で飼育が行われ、最大で年に 6 回（春 2、夏１、初秋１、晩秋２）もの蚕の飼育が行われました。秋が深まるとクワの葉は固くなり、餌として与えるのに苦労しましたが人工飼料が開発され問題の解決につながりました。シリーズの第 2 回でもご紹介した、ひきる（５齢の幼虫がさなぎになる直前、体の色が飴色を帯びること）幼虫をうつす回転まぶしは画期的な発明で、仕事の効率が上がりました。

昭和 50 年の終わりにはヤママユづくりもてがけ、相模天蚕糸として売りに出されれましたが飼育が難しく、軌道に乗らず頓挫してしまいました。

このように化学繊維や中国産の輸入生糸に押され日本の養蚕は厳しい状況に置かれるようになっていきましたが、養蚕農家はいろいろと工夫を凝らして何とか立て直そうとしたのでした。（山口　雅之）

城山総合事務所入口バス停

- 城山公民館
- 市立川尻小学校
- 温泉坂
- 久保沢観音堂
- 大正寺
- 加藤武雄の墓
- 喜多梅巌墓表
- 尻無沢
- 加藤武雄生家
- 慈眼寺（都井沢の観音様）
- 普門寺
- 城山のウラジロガシ
- 三嶋神社
- 石造物群
- 県立津久井湖城山公園水の苑池

城山高校前バス停

知ってナットク！
しろやま

城山検定

問　題

この地域には自然の地形と関係が少ない変わった地名があります。

谷ヶ原と都井沢（といさわ）との境界に、地番が「いろは畑」と呼ばれた所がありました。

他に現在「仁・義・礼・智・忠・信・孝」という変わった地名があります。それは、どこでしょうか？

① 久保沢（くぼさわ）　②小倉（おぐら）　③中沢（なかざわ）

説明版があります

（出題者　樋口　孝治）

城山探訪　地域の農業技術員「片山一男君之碑（かたやまかずおくんのひ）」

谷ヶ原にある大正寺の石段を本堂に向かって上がって行くと、左手にその碑はあります。

片山一男という方は岡山県出身で、農業技術員として養蚕の指導・普及のために旧川尻村に来ました。当時は片山さんのような農業技術員が全国的に活動し、地域の活性化に大変貢献していました。片山さんは養蚕に限らず他の農業についての技術指導も熱心で、研究意欲も旺盛でした。また、大変温厚で誠実な人柄だったので誰からも慕われていたそうです。しかし、大正８年に流行したスペイン風邪にかかり３０歳にならない若さで亡くなってしまいました。遺骨はしばらく大正寺で保管された後故郷に帰りましたが、片山さんを偲ぶ村人の心は深く、その思いを碑という形で残したそうです。裏側には「大正九年三月川尻村農業会役員一同外有志建立」と刻まれています。（金子　直美）

出典：『せきのかわ　第 53 号』

しろやま ミニ図鑑

成虫で越冬する蝶（ちょう）たち

冬は変温動物の昆虫たちにとってとても厳しい季節です。卵や蛹でじっと寒さをしのぐものが多い中、成虫で越冬する蝶たちもいます。城山ではキタテハ、ルリタテハ、テングチョウ、ヒオドシチョウ、（キタ）キチョウ、ムラサキシジミ、ウラギンシジミなどはその代表的な蝶です。キタキチョウ、ルリタテハ、テングチョウなどは土手の日が当たりにくい斜面などで羽を閉じて越冬しています。羽の裏側は濃い茶色系で周りに溶け込んでしまいます。越冬する蝶たちはずっと冬眠しているわけではなく、暖かい日などには散歩に出かけるようこともあるようです。地球温暖化の影響か最近城山でも見られるようになった蝶たちの中に、ムラサキツバメ、クロコノマチョウがいますがいずれも本来成虫で越冬します。ムラサキツバメは葉裏で集団で越冬するようですが、城山で確実に春まで生き延びられているか確認しておりません。クロコノマチョウ越冬状態は謎でこの城山に土着しているのか、夏から秋にかけて南方からやってきて冬は死に絶えてしまっているのかわかりません。ムラサキツバメ、クロコノマチョウを冬から春にかけて、観察された方はぜひご連絡いただきたいと思います。（山口 雅之）

お待たせしました！いよいよ開催

城山エコミュージアムのつどい

日 時：平成 28 年 2 月 28 日（日）
午後 1 時 30 分～（開場 1 時 15 分）

内 容：◎講演「地域のまつりについて」
地域の暮らしとまつりについてお話頂きます
講師　市立博物館　学芸員 加藤　隆志氏
◎城山エコミュージアム活動発表・展示等

会 場：城山公民館　2 階　大会議室
申 込：城山公民館　電話 042-783-8194
申込期間：平成 28 年 2 月 2 日（火）～2 月 26 日（金）

申込必要

城山検定 解説

答え：③中沢（なかざわ）

明治初年「地租改正（ちそかいせい）」の時、各村では地域を測量して地図をつくりました。その時、当時の三沢（みさわ）村村長安西要五郎（あんざいようごろう）が、『南総里見八犬伝（なんそうさとみはっけんでん）』の八つの玉から「仁（じん）・義（ぎ）・礼（れい）・智（ち）・忠（ちゅう）・信（しん）・孝（こう）」という小字（こあざ）名にしたと伝えられています。８つの内、中沢の地名は「悌」がなく７つです。（樋口 孝治）
参考『城山町の地名』
（平成 13 年城山町教育委員会）

次号は、平成 28 年３月１５日頃発行予定です

編集後記

秋のツアー報告を中心に編集しました。エコミュージアムらしい一番の取組みですが、楽しくためになる様子が皆さんに伝わったでしょうか？城山のことを知って貰えるような記事になったでしょうか。（田畑　房枝）

企画/作成：相模原市城山エコミュージアム運営委員会
発　行：相模原市立城山公民館
TEL：042-783-8194【直通】
FAX：042-783-1721
ホームページをパソコンで見る時は
相模原市　城山エコミュージアム　検索
相模原市立城山公民館ホームページ
http://www.sagamihara-kng.ed.jp/kouminkan/shiroyama-k/index.html